新編

大村市史

第一巻

自然・原始・古代編

序

大村市は、昭和十七年二月十一日に一町五村が合併して誕生しました。その二〇周年を記念して、昭和三十六年に市史下巻が、三十七年に市史上巻が刊行されました。戦後という言葉が生きており、地域の歴史研究が端緒を迎えている時期でした。

その後、大村の歴史は、地域の研究者達による研究の蓄積とともに、国内の様々な研究者によって取り上げられてきました。それは、大村の歴史が、単に地域の歴史にとどまることなく、日本史・世界史において興味の尽きない内容を持っているからです。

歴史は、過去の出来事や先人たちが生きた日々を通して、現代に生きる私たちに、未来へ向かう力と可能性を伝えてくれます。大村市は、日本初のキリシタン大名大村純忠と天正遣欧少年使節をはじめとして、幕末・近代の日本で活躍した渡辺清、渡辺昇、楠本正隆などの政治家、長与専斎などの医者、原子物理学の長岡半太郎、女子教育・知的障害児教育の石井筆子など、きら星のごとく輝く人々を多く輩出してきました。

市の歴史を市民の皆さんにお伝えすることは、ふるさとを再認識し誇りを持っていただくために、大変重要なことです。私たちは、改めて郷土の脈々と続く歴史を学びながら、多くの偉人を輩出し、育んだ大村の歴史を、これからを生きる人々に伝えていきたいと思います。それは、現代に生きる私たちに課せられた使命でもあります。このため、大村市では平成二十四年に迎えた市制施行七十周年を機に、新たな市史を刊行することにいたしました。本市の歴史をきちんとした形に残し、将来への礎とすべきだと考えたからです。

今回、新たに市史を編さんするに当たり、歴史だけでなく、地質、地形、生物など幅広い分野の専門家にご参加いただきました。それは、大村という土地の成り立ちから始め、その中で生きてきた大村人を描こうとしたからです。このため旧大村市史では掲載されていなかった原始・古代などの分野を今回取り上げています。『新編大村市史』第一巻は「自然・原始・古代編」です。

結びに、本編第一巻「自然・原始・古代編」の刊行にあたり、貴重なご意見をいただきました大村市史編さん委員及び編集委員の皆様、部会長をはじめ各執筆員の方々、関係者各位に心からお礼を申し上げます。

平成二十五年三月

大村市長　松本　崇

編さんの辞

最初の『大村市史』が刊行されたのは昭和三十六年・三十七年である。これは、当時の大村市長大村純毅氏の発意により、大村市市制施行二十周年記念事業の一環として企画されたもので、上・下二巻（上巻＝近世編・下巻＝近現代編）という構成で刊行された。

昭和三十年代、市町村の合併を記録・顕彰しようとする機運と相まって、県市町村史の編さんが全国的規模で推進されたなかで、長崎県においても『長崎県史』の編さんと併行して『大村市史』の編さんが企画されたのである。とくに「上巻」（近世編）は、当時の市域を対象とせず、旧大村藩領東西彼杵郡を対象に叙述したため、両郡における町村史編さんのスタンダードとなり、当該自治体史の編さんに、大きく貢献した。

昭和四十年代以降、自然科学の研究進展に伴って各地の環境が明らかにされると共に、旧石器・縄文・弥生・古墳時代を始めとする遺跡が盛んに発掘調査される一方で、御家人・荘園（彼杵荘）・在地領主・一揆（彼杵一揆）・守護・九州探題・宗教・石造文化の研究が盛んに推進された。注目されるのは、大村藩政の基本史料である「郷村記」（七九巻）・「見聞集」（七〇巻）・「九葉実録」（六四巻）が復刻され、大村藩研究の起爆剤となったことである。これを契機に、大村史談会の機関誌『大村史談』に、多数の論文が掲載された。

こうした趨勢のうえに、改めて「大村市史」を編さんすることとなり、大村市の発議で、平成二十年五月三十日、第一回の準備懇談会が開催された。次いで平成二十一年六月三十日、準備懇談会は編さん委員会に切換えられ、新しく編集委員会が組織された。

更に、各時代の班長を選出して各部会が頻繁に開催され、細部にわたって項目立てが行われた。その中で藤野が提案した「第一次原案」が補強され、その成果に基づき、随時編集委員会を開催して、全体の調整を行い、統一した方針のもとに叙述し編集することとなった。

さて、今回の市史編さんは、現大村市長松本崇氏の発意により、市制施行七十周年記念事業として企画されたもので、前『大村市史』の刊行以来、すでに五十年が経過している。市長は第一回の準備懇談会に出席し、新しい「大村市史」の編さん目標と意義について強調し、とくに地元の研究者を執筆者に加えるよう要望された。また市長は、わざわざ上京され、今回の市史編さんについて、その熱意を開陳され、その情熱に打たれた。編集委員会は、その意を忖度し、多数の地元の研究者を執筆者に加えた。その意味で、本市史は大学教員と地元の研究者との連携プレーによる共同作業である。

顧みて、私が大学の卒業論文のテーマに「大村藩」を選び、研究を開始したのは、戦後間もない昭和二十四年である。当時、大村藩に関するまとまった研究は、幕末維新期を対象とした山路彌吉編『臺山公事蹟』（大正九年刊行）があるのみで、他はキリシタンに関する若干の論文が存在する程度であり、全く先行研究なしのゼロからの出発であった。また、全国的に「藩政史」に関する研究も緒についたばかりで、参考文献（論文）に乏しく、模索の状態からの出発であった。

幸い、大村純毅氏（旧大名家）のご好意により、同氏所蔵の「大村家文書」（その代表は「九葉実録」）の調査を行う一方で、「郷村記」・「見聞集」の全面分析を試み、リュックを背負って、旧大村藩領四八ヶ村をフィールドワークし、その成果に基づいて卒業論文を書き上げたが、それは十年後執筆・編さんした『大村市史』（上巻）で具体化した。

同市史「上巻」は、近世編（＝藩政編）となっているが、その前史として大村氏の台頭から書き始め、南北朝―室町期―戦国期（中世）を対象に叙述したが、時間的制約と個人の能力の限界から、簡単に叙述す

るに留まった。今回は、前述したように、その後の研究成果に基づき、自然・原始・古代から近現代に至る長期的歴史過程の全貌について、各時代の専門家に多数協力・執筆して頂き、全体として、均整のとれた体系的叙述を志向した。とくに当該地域の歴史叙述に留まらず、広い視野から比較研究の視角を導入し、統一権力である幕府はいうまでもなく、国際環境の変化に連動させながら当該地域を歴史的に位置づけるという、自治体史の新たな視角と方法を提示した。

平成二十五年三月

新編大村市史編集委員長　藤野　保

自然編

新編大村市史第一巻 目次

第一章 地形・地質

第一節 地形地質概説 …… 3
第二節 大村地域の古第三系 …… 6
第一項 古第三系の分布 …… 6
第二項 地質構造 …… 7
第三項 地質の特徴 …… 8
第四項 多良岳火山地域の古第三系 …… 12
第五項 ボーリング資料 …… 12
第三節 多良岳火山地域及びその他の火山岩類 …… 14
第一項 大村市三浦半島地域の地質 …… 14
第二項 大村市多良岳火山地域の地質 …… 18
第四節 大村平野 …… 32
第一項 大村扇状地 …… 32
第二項 新期扇状地及び三角州 …… 34
第三項 河岸段丘 …… 35
第四節 基底地形 …… 36
第五節 扇状地完成の年代 …… 38
第六節 大村扇状地の特徴 …… 40

第七節　旧河道について……41
第八節　扇状地の黒土……43
第五節　大村湾……45
第一項　大村湾という名前の由来……45
第二項　大村湾の地形と現況……48
第三項　大村湾付近での西彼杵変成岩類の分布――大村湾の基盤は何か――……48
第四項　大村湾の形と海底地形……51
第五項　大村湾の海洋学的特性……52
第六項　大村湾の貧酸素水塊……53
第七項　大村湾の海底堆積物の分布……54
第八項　海底ボーリング調査によって得られた堆積物の記載とそれが示す古環境……55
第九項　大村湾形成過程と海水変動面……59
第六節　地形地質災害及び鉱物資源……63
第一項　活断層と地震……63
第二項　地下資源……75
第七節　大村市周辺の地史……88
第一項　始新世～漸新世（五五〇〇万年～二五〇〇万年前）……89
第二項　中新世～鮮新世（二五〇〇万年～二〇〇万年前）……92
第三項　第四紀更新世（二〇〇万年前）以降……95

第二章　気象

第一節　気象観測の始まり……97
第一項　日本の気象観測の始まり……97
第二項　長崎の気象観測の始まり……97
第二節　気候区分……98
第一項　日本の気候区分……98
第二項　九州の気候区分（長崎県の気候と大村の気候）……98
第三項　大村の降水量……100
第四項　大村の年平均気温……102
第五節　大村市の一月から十二月までの平均気温……103
第三節　気象災害……107
第一項　過去二〇〇〇年の日本の気象災害……107
第二項　諫早豪雨昭和三十二年（一九五七）七月二十五～二十六日……110
第四節　近年の気候変動（地球温暖化）……114
第一項　最近一〇〇年間の気候変動……114
第五節　歴史時代から地質時代の気候変動……116
第一項　過去一〇〇〇年の気候変動……116
第二項　過去二万年の気候変動……116
第三項　過去一三万年の気候変動……117

第四項　過去七〇万年の気候変動……117
第五項　過去七〇〇〇万年の気候変動……118
第六項　これからの気候変動……118

第三章　植物と動物

第一節　植物……121
第一項　植生と植物相……121
第二項　藩政時代からの造林（人工林）、天然林……144
第三項　大村市の木と花……148
第四項　大村市の巨樹・巨木及び黒木ヶ原岳の巨大モミ……149
第五項　神社・仏閣の森―「鎮守の森」……153
第六項　大村市内の国道・県道・市道の街路樹……156
第七項　はびこる帰化植物―帰化率から……157
第八項　大村藩時代の「長崎街道」を歩く……161
第九項　大村藩時代の山野の土産、売出物と現代の農作物、果物類ほか……164
第一〇項　長崎県の植物に関係した人たち……165
第二節　動物……168
第一項　哺乳類……168
第二項　鳥類（留鳥・渡り鳥・旅鳥）……180
第三項　爬虫類……190

第四項　両生類……197
第五項　魚類……203
第六項　昆虫類……215
第七項　水生生物（エビ・カニ類）……225
第三節　海洋環境と生物……236
第一項　大村湾の珍しい生物……236
第二項　大村湾の水環境と赤潮……241
大村湾海産生物リスト……246

原始編

第一章　旧石器時代

第一節　旧石器時代概説……273
第一項　日本における旧石器時代人……274
第二項　長崎県の旧石器時代……275
第二節　大村湾をめぐる旧石器文化……280
第一項　遺跡の分布……280
第二項　大村湾東岸のナイフ形石器文化……282
第三項　大村湾南岸の遺跡群……290

第四項　大村湾西岸のナイフ形石器文化……293
第三節　大村湾をめぐる細石器文化……295
第一項　井手寿謙と野岳遺跡……295
第二項　芹澤長介と野岳遺跡の邂逅……297
第三項　鈴木忠司と野岳遺跡……300
第四項　野岳遺跡の今日的評価……301
第五節　大村湾地域の細石刃石器群……303
第四節　古大村盆地をめぐる旧石器文化……309
第一項　黒曜石……310
第二項　主な黒曜石原石の産状と形質……311
第三項　石材獲得戦略……312
第四項　大村湾周辺地域の石材獲得戦略の時代的変遷……313

第二章　縄文時代

第一節　環境の変化と縄文文化の成立……317
第一項　縄文時代概説……317
第二項　縄文時代の特徴……318
第三項　縄文時代の時期区分……319
第四項　対象地域における縄文時代遺跡……319
第二節　旧石器時代から縄文時代へ……321

第一項　氷河期の終焉と環境変化への適応……321
第二項　長崎県における土器発生期の様相……321
第三項　長崎県の縄文時代草創期石器群……323
第四項　大村湾東岸の遺跡……324
第五項　大村湾南岸の草創期の石器群……324
第六項　「神子柴」的石器文化の出現……326
第七項　草創期から早期初頭の石槍……328
第三節　大村湾の形成と海洋適応（縄文早期末～後期）……331
第一項　縄文海進と大村湾の形成……331
第二項　沿岸部への進出……332
第三項　漁労活動の開始……335
第四項　滑石混入土器の展開……336
第五項　生業……337
第六項　住まいと暮らし……340
第七項　西北九州型漁労文化の盛衰と大村湾岸遺跡群……341
第四節　縄文農耕の可能性と周辺文化の流入（縄文時代晩期～弥生時代早期）……345
第一項　縄文農耕の研究史と最近の動向……345
第二項　土器編年と地域間関係……350
第三項　生業の変化……351
第四項　周辺地域からの影響……353

第五項　大村湾岸遺跡群の特色……356

第三章　弥生時代

第一節　弥生時代の成立と地域社会……361
第一項　弥生時代の始まり……361
第二項　弥生時代の年代と時期区分……364
第三項　初期農耕と環大村湾地域……365
第四項　水上交通の発達と文化伝播……366
第二節　環大村湾を取り巻く一帯の主要遺跡……367
第一項　大村湾沿岸地域の遺跡……367
第二項　諫早地域の遺跡……385
第三項　佐世保・相浦地域の遺跡……387
第三節　各時代の様相……397
第一項　稲作が始まった頃　弥生時代早期の様相……397
第二項　定着する弥生文化　弥生時代前期前半の様相……398
第三項　拡大する弥生社会　弥生時代前期後半の様相……398
第四項　活発化する弥生社会　弥生時代中期前半の様相……399
第五項　環濠集落の出現　弥生時代中期中頃の様相……399
第六項　玄界灘地域とのつながり　弥生時代中期末～後期前半の様相……400
第七項　透かし入り器台の出現と葬制の変化　後期後半から終末期の様相……402

第四節　弥生時代と大村湾文化の成立……403
第一項　異なる土器文化の共存……403
第二項　水上交通の発達と大村文化……405

第四章　古墳時代

第一節　古墳時代の始まり……409
第一項　古墳と古墳時代……409
第二項　倭国の大乱とその後……409
第三項　古墳時代の土器……414
第四項　畿内型古墳と在地の古墳……415
第二節　県内の前方後円墳……418
第一項　松浦郡……419
第二項　高来郡……421
第三項　彼杵郡……424
第三節　市内の古墳時代の様相……432
第一項　前期……432
第二項　中期……440
第三項　後期……450
第四項　終末期……456
第四節　古墳時代の生産・生活遺跡と風土記……460

第一項　郡川周辺の生産・生活遺跡……460
第二項　風土記に載せる彼杵郡……474
第五節　古墳時代の終焉と郡司への道……477

古代編

第一章　飛鳥・奈良時代

第一節　律令国家の形成……485
第二節　『肥前国風土記』の世界……488
第一項　火の国の伝説……489
第二項　大村湾の真珠……491
第三項　神功皇后の新羅征討伝承……493
第三節　律令国家の空間支配……494
第一項　政治的領域……494
第二項　郡家・郡家津と郡寺の整備……498
第三項　駅路の整備と変遷……502
第四項　烽……512
第五項　水上交通……515
第六項　条里……519

第七項　『和名抄』の郷名比定……523

第二章　平安時代

第一節　対外関係……529
第一項　五島列島の中継貿易……529
第二項　貞観事件及び新羅海商とのネットワーク……532
◇コラム◇　東アジアの動向……535
第二節　初期武士の台頭……536
第一項　承平・天慶の乱と背景……536
第二項　刀伊の入寇……538
第三項　大蔵氏一族の九州土着……539
第三節　荘園における初期武士の展開……540
第一項　彼杵氏薩摩移住……540
第二項　平直澄の乱……541
第四節　藤津郡との関係……542
第一項　新義真言宗開祖　覚鑁……542
第二項　藤津郡に生まれた碁聖法師　寛蓮……547
参考文献……553
資料・写真協力者及び提供者一覧……585
編さん関係者名簿……585

凡例

◆『新編大村市史』は、大村市制七十周年を迎えるにあたり、昭和三十六、七年に刊行された『大村市史』上・下巻とその後の調査・研究の成果を踏まえ、新規に編さんされるものである。

◆本書は『新編大村市史』全五巻の内の第一巻であり、本書の内容は、自然編、原始編、古代編で構成され、各編の冒頭には、編扉をもうけた。

◆原則として、記述にあたっては常用漢字・現代かなづかいを用いるが、固有名詞、歴史用語又は引用史料・引用文等については、この限りではない。

◆引用文・引用史料は、短文の場合は「　」を付し、長文の場合は一段下げとした。

◆漢文史料については、読み下した形で掲載した。

◆難解な語句についてはふりがなを付し、必要に応じて補足説明を設け、読みやすさに努めた。

◆地名の表記は、現行地名を用い、研究・分析上の必要に応じて旧字名を使用した。

◆本文中の人名は、敬称を省略し、動植物の名称は、すべてカタカナとした。

◆本文中のアルファベットの表記については、すべて縦書きにそって次の通り表記する。

（例）Dorman Long

◆なお、学名については、斜体とする。

（例）*Cyclamina pacifica*

◆mやkgなど、数量の単位については、次の通りカタカナ表記とする。

（例）m ↓ メートル

◆数を記述するにあたって主に漢数字を用い、年月日または時間を除く一般数においては十百を入れない。

（例）一般数 ↓ 三一五〇メートル

年月日　→　十月二十六日　　時間　→　二十三時二十七分

◆年号の表記にあたっては、日本暦を用い、適宜その下に（　）をもって西暦年を付記した。

◆図・写真と表の番号は、それぞれに章単位に一連の番号を付した。図・写真の番号、及びキャプションにはアラビア数字を用いた。

◆図でスケールを掲載していないものについては、縮尺不統一である。

◆図の出典については、原則として著者名と刊行物名をキャプションに掲載し、詳細は巻末の参考文献に掲載した。

◆図を論文から転載する場合は、キャプションには著者名と掲載年のみに省略して掲載した。報告書から転載する場合は、キャプションには出版元の教育委員会又は団体名、報告書名、号数のみに省略して掲載した。

（例）三上（２００５）

（例）大村市教育委員会　大村市文化財調査報告書　第12集より

◆本書を執筆するにあたり、参考あるいは引用した資料・文献については、未刊史料名・論文名は「　」、刊行物は『　』を付し、出版元、刊行年を記載した。

◆各章の参考文献は、本文中では史料・文献名は「　」『　』を付し、（　）に刊行年を記し、それ以外はまとめて巻末に掲載した。

◆本巻の執筆分担は、各項・節・章の末に記し、巻末一覧のとおりである。

◆写真の提供者・協力者に関しては、必要に応じてキャプションに掲載し、それ以外はまとめて巻末に掲載した。

◆本文中には、現代の人権意識からみて不適切な表現を用いた場合があるが、歴史的事実・事象をそのまま伝えるため当時の表記どおりに掲載している。

大村湾と大村扇状地　後方は多良山系

夫山川は万物を生育するの具にして、其一欠る時は土壌乾涸し、
五穀生するあたはず。因て水面若しくは湫溢（しゅういつ）より上騰する
『大村郷村記』第二巻第十二　福重村

黒木渓谷

イチイガシ天然林

イチイガシ樹幹の模様

萱瀬スギ

オオムラザクラ

野岳湖

野岳遺跡の細石器

岩名遺跡　早期土器

富の原遺跡A地点墓地　祭祀調査風景

富の原遺跡B地点墓地　20号甕棺墓出土人骨と鉄剣出土状況

小佐古石棺墓群1号石棺墓　出土状況